

この地理学の先進国の言語を覚える気になったのは、1972年3月から1年間の外国出張中に3カ月間弱、ウブサラとストックホルムを訪ずれる計画を立てたからに他ならない。リンガ フォンや語学4週間ものから得るのでは、やはり何かもの足りない。結局言葉というのはその国の人から直接聞いてみてやっと安心できるものではあるまいか。その様な次第で丸ビルで夜開かれている講習会にでかけることにした。講師のセシリア・ウッターストレーム先生はストックホルム大学語学部出身の金髪の美人で、一年半ほど前に来日して、もはや日本語がかなり巧みであった。受講者は20数名、若者が殆んどだが、中年者も数名はいる。筆者にしてみれば、6年前の自動車教習所での受講以来の勉強である。教える一方の教師稼業にも時に直接、単純に教わることは、謙虚さを保つ意味も加わって必要だと思う。それには知らない外国語がもっともよい。ヴァル、スネラ、オ、レース、エフタ、メイ、アリホッパ(さあ皆さん、私の後について読んで下さい)。ハニ、ノラ、フローゴル(何か質問はありませんか)という具合に授業が始まる。「ドイツ語に近いではありませんか」と他人から云われても、教わっている身になれば、言語学上近似でも単語や独特の表現がある以上は、全部始めから覚える他にはない。ネー(いゝえ)、オヤッソー(おやそうですか)はむしろ日本語と同じではないか。スコール(乾杯)は「茶わん」のこと、グラスは「アイスクリーム」の意味しかない。ファル(父)、モル(母)を組み合わせて、モルフアル(母方の祖父)、モルモル(母方の祖母)ファルモル(父方の祖母)、ファルファル(父方の祖父)、子供はバーン、孫はバーンバーン、息子はゾーン、娘はドッテル、孫のうち息子方の男の孫はゾーンゾーン女の孫はゾンドッテル、それ故娘方の女の孫はドッテルドッテルと理詰めに組合わせて語ができていて面白い。ともかく、その国の文化を手早く理解するにはその言葉から知識を得ることが手取り早く有効だと思う。そのよい証拠に半年マルメに在住したことのある一青年が、初級の講習を熱心に受け直していた。アユ、アユー(さよなら、さよなら)。 (1971年12月13日)

ダブルパンチのドルショック

正井 泰夫

1971年は、日本経済はもとより、世界経済にとっても、大きな変動のあった年であった。私は、それを身をもって経験することとなった。

1971年8月17日に、羽田をたってオーストラリアのキャンベラへ向う予定であったが、そ

の後の経済界の嵐を予告するかのように、台風のためとかで、出発は1日延期になった。東京の空は青く、風もない。何とホンコンが台風なのだそうである。翌日の16時に出発予定とかで、家にもどってのんびりとしていたら、翌朝9時に電話があり、11時に出発が早まったとのこと、寢床より飛び起き、タクシーを走らせた。すべり込みセーフでBOACに乗り込み、乗換地のホンコンまで行った。カイトク飛行場がすぐ下に見える所まで降下したが、風がまだやまないとかで、バンコクまで直行。そうしたら、台風がおさまったとかで、すぐまたホンコンへ。そしてQantasでシドニーへ。

シドニーに到着き、別の空港から出るキャンベラ行きに乗り換えるのであるが、幸いグループだったので、迎いのバスがきた。我々一同は米ドルをオーストラリアドルに換えようとしたが、皆ことわられてしまった。米ドルの替為相場が不安定なためだそうである。切符はあったのでキャンベラへ。第12回太平洋学術会議開催地のオーストラリア国立大学の寮に泊ることになったが、腹がへってたまらない。軽い朝食をシドニーに着く前にとっただけで、夜8時からの「無料の」レセプションまで空腹ですませた。

翌日からの国際会議場の銀行窓口はテンヤワンヤである。何しろ、1日に1人につき20ドルとか100ドルとかしか換えてくれないからである。巡検参加費用も払えないし、買物にも行けず、手紙を出すのも儉約するといった始末であった。その上、米ドルの価値が下がったとかで、日本円に換えて330円程度にしかならない。日本を出る前には、1米ドルを368円で買ったのであるから、大分損をしたことになる。

行きも大変だったが、帰りはもっと大変であった。帰国の日の朝、ちょうどラジオのニュースが、日本がついに変動相場制に移ったことを告げていた。途中寄ったホンコンの空港の銀行では、米ドルの交換は一切停止という貼紙がでていた。土産物店では従来のドル価格で物を売っているの、やけになって香水などを買っている日本紳士も多かった。帰国後、余ったドルを円に換えたら、手数料も含めて232円であった。

その後、ますます円の価値が高まり、米ドルは下った。大さわぎになる前に「契約」しておいたアメリカの出版社依頼の原稿料(ドル払い)は、名目的には全く同じであるが、実質的には、かくして大幅にダウンすることとなった。これこそ、全くのダブルパンチである。